古代・中世の石巻

稲作が伝わり、石巻地域の人々の生活も大きく変わり、やがて各地で古墳が作られるようになりました。石巻市内には、大きな高塚式の古墳は、明確なものはありませんが、古墳時代の遺跡はたくさん見つかっています。

須江糠塚遺跡、田道町遺跡、新金沼遺跡、新山崎遺跡、五松山洞窟遺跡などからは当時の人々の様子がわかる資料が出土しています。特に新金沼遺跡からは、この地域の古墳時代の土器と一緒に東海系の土器と北海道系の土器が出土し、古代から石巻地域が、人々の交流する場所であったことがわかりました。

新金沼遺跡から程近い新山崎遺跡からは、西日本から伝わった方形周溝墓が発見されていて、石巻地域は比較的早く、畿内勢力（大和朝廷）の支配下に組み込まれていたと思われます。

新金沼遺跡から出土した
北海道系の続縄文土器（左）と
東海系の土器（右）

方形周溝墓

方形周溝墓は、四方に溝を掘って、その土を溝の内側に盛り上げた墓で、宮城県が北限になっています。

畿内に律令国家が成立し、東北地方中部以北にもその勢力が及んでくると、律令制度に基づいた郡が置かれました。石巻地域は牡鹿郡が置かれ、その後、牡鹿郡の一部が桃生郡となりました。この時期の石巻地域には在地系（蝦夷系）の人々と東国からの移民系の人々がいたことがわかっています。何らかの役所跡と推定されている田道町遺跡からは在地系の人々に対して出挙（すいこ）と呼ばれる一種の課税が行われていたことが確認されています。

田道町遺跡から出土の木簡
延暦11年（792）

清水尻遺跡出土　墨書土器

清水尻遺跡は、田道町遺跡に隣接する遺跡で、やはり何らかの役所跡と考えられています。

さらに時代が進み、平安時代の終わりごろには、渥美半島系の工人が来て焼いたと見られる壺と窯跡が発見されています。平泉藤原氏の需要を満たすためのものと考えられています。このころの石巻は、平泉と北上川舟運で結ばれ、その外港であったと考えられています。

鎌倉時代以降は、ほとんどは関東の御家人の所領となり、現在の市域は、牡鹿郡・遠島・桃生郡・本吉荘・深谷保にわかれていました。特に牡鹿郡は、有力御家人として平泉付近を所領とした葛西氏の飛び地とされました。

このように石巻地域は、古代・中世から交通の結節点でした。

水沼窯跡出土　壺